

『秘密』

東野圭吾 著 文春文庫 660円（税込）

ファンタジックな設定、リアリティに富む展開 ラストの絶妙なひとひねりに心奪われて

東野圭吾の作品については、「白夜行」がドラマ化され、ベストセラーとなっているところではあるが、「秘密」もぜひ一読いただきたい作品である。

映画化されたのでご存知の方も多いと思うが、設定自体は、妻と小学5年生の一人娘がバス転落事故に遭い、妻は死亡し、娘は一命をとりとめるものの、回復した娘の意識は、娘のものではなく妻のものだった…という面白いがまったく見たことがないわけではない、というものである。

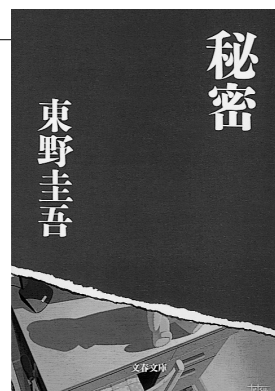
しかしながら、このような比較的単純かつファンタジックな設定をものともせず、その後の展開はリアリティに富み、読者をまったく飽きさせない。懸命に娘の生活に慣れようとする妻、このような事情を知って成長する娘の体を持つ妻の私生活が気になって仕方のない夫、それぞれの葛藤・悩み、そして発端となった事故の加害者家族とのふれあいなどが、「夫婦愛」という一本の軸のもとで、いい意味で満遍なくち

りばめられ、うまく描かれている。そして、絶妙なひとひねりがなされたラストは見事としかいいようがない。妻の一大決心を、夫に対する「嘘」ではなく「秘密」であるとしたところに、この作品の軸である「夫婦愛」が読み取れ、切なくも感心させられる。

所詮ファンタジーなどと軽い気持ちで手に取った1冊ではあったが、「夫婦愛」と「親子愛」の関係・優劣の有無等を考えさせられ、ラストのひとひねりに心を奪われ、ふとしたときに思いを馳せてしまう、そんな作品である。

同じ「秘密」を一生抱える知力・精神力・勇気は私にはないかもしれない、いや、それよりも、夫と妻の立場が逆で、子どもの体を借りて生き残った夫が自分だったら、妻は果たして喜んでくれるのだろうか……と、思いを馳せてしまったりするのである。

（会員 大島 正照）



Cinema 心に残る映画

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』

2000年／デンマーク／ラース・フォン・トリアー監督作品

コミュニケーション不能な領域に 閉じこもる人達と寄り添うためには…

「かわいそうな障害者を救うためなのだ」——大きな勘違いをしながら知的障害者施設に就職した私が、むしろ、自分の方がよっぽど不幸なのだ気がつくのには、さほどの時間がかからなかった。知的障害を負っている人たちとのやりとりは、ときに理解不能だったり、奇想天外だったりするけれども、なによりも自然で、形容しがたいくらいに豊かで、想像できないほどに斬新なものであった。そして、彼ら・彼女らの多くがその天才的な能力をもってして夢見ている世界は、私からは全くコミュニケーションできないものだけれども、確実に豊潤なものであると直感させるものだった。私は、鈍器で思い切り殴られたような衝撃を受けた。

映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』は、全盲になりつつある主人公セルマが、結果的に処刑されてしまうまでを描いた作品だ。セルマは、世の中では（＝コミュニケーション可能な領域では）一貫して救われないし、作品中において、「努力していれば報われる」などといった類のモチーフは、一切明示されることがない。

しかし、この映画のところどころに挿入されているセルマの空想世界（ミュージカルシーン）は、このような現実世界とはまったく逆の様相を呈している。そこには、他人からはコミ

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』
発売元：松竹／フジテレビ／ア
スミック
販売元：松竹（株）ビデオ事業室
価 格：6,090円（税込）



ュニケーション不可能だけれども、「これさえあれば、世の中からどんなに見放されても、かろうじて生きていけるかも知れない」と確信させるほどに輝かしい世界が展開されている。

普段、扶助相談を担当していると、世の中からことごとく阻害され、心を閉ざしてしまっている依頼者に出くわすことがある。刑事被疑者・被告人の中にも、コミュニケーションそのものを拒絶している人がいたりする。失業、精神疾患、家庭環境、認知症などなど、決して自分が悪いわけでもないのに、いきなり社会の底辺に突き落とされてしまったら、誰でもそうなるに違いない。そして、こういった人たちからみると、我々弁護士は、世の中での（＝コミュニケーション可能な領域での）成功者として映らないだろう。

世の中から見放され、法的に困っているが故に、コミュニケーション不能な領域に閉じこもってしまいがちな依頼者・被疑者被告人——そんな人達とも思いを共にし、寄り添いあいながら一緒にやっていくためには、弁護士としてどうすべきなのか。自分を強烈に思い悩ませるこの難題に対して、この作品は、正面から答えるだけの何かを描いているように思えてならない。

（会員 太田 晃弘）